

# 『江戸名所図会』における『梅花無尽蔵』

中尾 健一郎

はじめに

書籍・作品等が挙げられる（論述上の都合により『梅花無尽蔵』所収の詩文は除く）。

『江戸名所図会』は、長谷川雪且の美しい挿絵に定評のある

著名な江戸案内記として知られている。またこの図会には、和歌、俳句、漢詩、史書などが随所に引用されており、江戸の各地がいわゆる歌枕として名所化して記されている。近年の研究において、挿絵に附された詩歌では、俳句なら榎本其角、漢詩なら服部南郭の作品が多く、彼らは江戸の土地を詩歌によって表現する和と漢の代表であったとされている！。

ところで、挿絵に添えられる漢詩については服部南郭が最多であるとしても、挿絵以外についてはどうであろうか。挿絵のほかに引用されている漢詩・漢文について見れば、鐘銘・墓碑などの寺院で採集したと見られる資料を除けば次の

漢文

『日本書紀』『日本後紀』『続日本紀』『続日本後紀』（日本）三代実録』『延喜式』『東鑑』『日本年代（記）配合鈔』『武蔵国風土記』『武蔵国風土記残篇』『鎌倉志』『宝鑑録』『和名類聚抄』『浄土伝灯系図』『神風抄』『増統会通韻府群玉』所引『夷堅志』、范成大『梅譜』、平貞盛『願書』、宇都宮貞綱『両面之大旗来由記』（附：右衛門大夫宗仲書）、義純『青龍山葉師仏像縁起』、『江亭記』（蕭菴龍統「寄題江戸城静勝軒詩序」および蕭菴ら五人の禅僧の漢詩各一首と希世靈彦の跋、暮樵得么「寄題左金吾源大夫江亭」詩および三人の禅僧による同題の漢詩各一首、暮樵の「左金吾源大夫江亭記」を含む）、沢庵宗彭「万年石

之記」、林羅山「王子権現社縁起」、林鶯峰「癸未紀行」、林榴岡「毘沙門天王縁起」、高泉性激「武州東叡山勸学講院了翁僧都道行碑記」、元政「勸化簿」、宣存「禁殺碑」、服部南郭「古廟碑」、成島錦江「飛鳥山碑銘並序」、同「熊野三神伝記」、同「富賀岡八幡神祠石華表銘並序」、石鳥筑波「道灌丘碑文」

### 漢詩

空海『性靈集』所収「詠陽炎喻」(附・唐「陸勲志怪録」)「周処風土記」、義堂周信「観金沢藏書而作」、絶海中津「題太寧寺」六首、道興准后「詩」(山攀峻險海波瀾)、「沢庵和尚京都紀行」所収「過品川」、林羅山「丙辰紀行」所収「詩」(懐古淚痕羈旅情)、林鶯峰「癸未紀行」所収「六郷橋吟」、東臯心越「(金沢)八詠」八首、了然尼「偈」

右の例のうち漢詩および『江亭記』所収の漢詩九首について見れば、『江戸名所図会』(以下、『図絵』と略記)の挿絵に江戸時代の文人の詩が多く載せられる傾向があるのと対照的に、儒者林羅山・鶯峰父子と明からの渡来僧東臯心越のほかは概ね江戸時代以前、特に鎌倉・室町期の僧侶の作であり、室町時代の絶海中津による「題太寧寺」六首、江戸初期の東臯心越による「八詠」八首が多いものに属する。

本稿に取り上げる『梅花無尽蔵』の作者で、室町末期の詩人万里集九(一四二八?)については、実は十二首の詩と二

篇の詩序が採用されており、漢詩について見れば、挿絵に十四首も引用される南郭の作を除いて、個人の作品としては数量的にはもっとも多い。かつ絶海の「題太寧寺」六首と心越の「八詠」八首が、特定の一地点の景観を連作詩にまとめているのと比べて、万里の場合は「品川駅」「神奈川駅」「金沢」(現在の横浜市金沢区)というように複数の地点で作られたものであることも目を引く。しかるに先行研究においては、『図会』に引用されている万里の漢詩文が『梅花無尽蔵』に由来することを指摘するにとどまり、『図絵』に基づいた『梅花無尽蔵』の出自や、『江戸名所図会』と『梅花無尽蔵』の関係については特に検討されていないようである。

『図絵』が編纂された当時、万里が室町時代の武将で江戸城の創始者でもある太田道灌との交流によって知られていたにしても、いったい『江戸名所図会』の編者は何故にこのように万里を重んじたのか。またその基づくところの『梅花無尽蔵』はいかなるテキストであったのだろうか。以上の問題意識から出発し、諸文献を調査・分析した結果判明したのは、『図会』の校訂者である斎藤県磨が『梅花無尽蔵』を所有しており、これに基づいて『江戸名所図会』を校訂・増補したということである。また県磨が所有していた『梅花無尽蔵』は国立国会図書館に収められている榊原芳野の旧蔵本であることも特定できた。本稿では、上記の結論を導きだすに至っ

た理由を『図会』と『梅花無尽蔵』の本文を比較対照することによって論述する。なお『図会』については松濤軒齋藤長秋著『江戸名所図会』（須原屋伊八・須原屋茂兵衛、天保五〜七年刊。長秋は鼎磨の父）<sup>3</sup>を、『梅花無尽蔵』所収作品については、特に断らない場合は、東京大学史料編纂所所蔵『梅花無尽蔵』（平戸松浦家旧蔵）を底本とし、引用に際しては基本的に通行の字体を使用する。また万里の作品題目には、巻数と市木武雄『梅花無尽蔵注釈』<sup>4</sup>の作品番号を附す。

### 一 『江戸名所図会』に引用される『梅花無尽蔵』

『図絵』に『梅花無尽蔵』の書名が見えるのは、全部で十八箇所、実際に詩文とその注が引用されているのは二十五箇所<sup>5</sup>にのぼる。ただ引用されているのは作品全体ではなく、重複しているものや、他の書籍に言及されているものの孫引きであったりもする。試みに下に、『江戸名所図会』の巻ごとに引用されている作品と出処、および引用箇所の名所を挙げよう。

表を一覧して分かるのは、『梅花無尽蔵』の引用は、主に「金沢周辺」「平川天満宮」「隅田川周辺」に集中しており、特に金沢と隅田川の周辺について記述する部分には、同じ漢詩が繰り返し用いられている。

### 『江戸名所図会』所引『梅花無尽蔵』

番号	『図絵』巻数	場所	名所	『梅花無尽蔵』所収作品	作品番号
①	巻二	東京都品川区	品川駅	「品川」 「長享丁未子春」	巻二・48
②	巻二	横浜市神奈川区	神奈川駅	「神奈川」	巻二・47
③	巻二	横浜市金沢区	能見堂 擲筆松	「二十有七己亥」詩題 「二十有七己亥」其三 「二十有七己亥」其二 「西湖梅貼軸詩」	巻二・134 巻二・136 巻二・134 巻二・136
④	巻二	横浜市金沢区	西湖梅	「貼西湖梅詩序」 「二十有七己亥」其二 「西湖梅貼軸詩」	巻六・42 巻二・135 巻三上・133
⑤	巻二	横浜市金沢区	貴妃玉簾 一連	「二十有七己亥」詩題、及び注二箇条	巻二・134
⑥	巻二	横浜市金沢区	瀬戸明神社	「二十有七己亥」詩題 「二十有七己亥」其一	巻二・134
⑦	巻二	東京都千代田区	平川天満宮	「余比寓武之江戸城」 「遊江戸城管丞相祠堂」 「読円悟禪師梅花詩」 「花下晚歩詩序」 「花下晚歩詩」	巻二・89 巻四・64 巻四・52 巻六・11 巻五・184
⑧	巻二	東京都文京区	慧日金剛寺	「芳林主盟」金地院 崇伝注の引用 （看季白墨蹟）新井白石手簡の引用	巻二・252 巻二・57
⑨	巻四	東京都文京区	寺		
⑩	巻三	東京都千代田区	平川天満宮		
⑪	巻三	東京都千代田区	平川天満宮		
⑫	巻三	東京都千代田区	平川天満宮		
⑬	巻三	東京都千代田区	平川天満宮		
⑭	巻四	東京都文京区	寺		
⑮	巻四	東京都文京区	寺		
⑯	巻六	東京都荒川区三河島	木戸三河守源孝範 第宅旧跡	「石戸公号能釣翁」詩題と詩注のみ。 （詩の引用なし）	巻二・74
⑰	巻六	東京都荒川区三河島	万里居士 寓居地	（右に同じとして）『梅花無尽蔵』の書名のみ。 （引用なし）	なし

⑤ ②④	②③	②①	②①	②①	②①
卷七	卷七	卷六	卷六	卷六	卷六
東京都墨田区	東京都墨田区	東京都荒川区	東京都荒川区	東京都荒川区	東京都荒川区
梅若丸塚	隅田河	橋場	橋場	橋場	橋場
「江上春望」の詩注 「木戸公号罷釣翁」の 詩注のみ	「江上春望」	「江上春望」の詩注	「江上春望」の詩注	「江上春望」の詩注	「江上春望」 「便面」 〔便面〕の詩注の訂正。 引用無し
卷二・88 74	卷二・88	卷二・88	卷二・88	卷二・88	卷二・88 99 99

次に同一作品の中に複数の引用箇所がある「金沢周辺」と「隅田川周辺」の詩文および注を図示しよう。なお傍線部冒頭には、一覧表中の通し番号を附し、注の本文は「」内に小字で記す。

**金沢周辺**

二十有七己亥、槃桓瀬戸六浦之浜、遺廟之前、掛昔時諸老所作之詩杉(板)、辺傍点画不眠(浜)、如新鋤之也。漸進入金沢称名之律寺、問西湖梅、以未開為遺恨矣。珠簾猫児・支竺群書之目錄〔称名寺水晶簾・唐猫児之孫、天時教、乃群書、蓋先代貯焉〕、無介者而不能属目〔寺秘件、々之物、容易無使人看之也〕。東室有律漢、对案写卷、遂不揚面。吁、律縛之伝、但守法而已。出

金沢七八里許、攀最高頂、則山々水々、面々之佳致。昔画師金岡、絶例(倒)擲筆之処、有名無基、但其名不甚佳。相伝曰、濃見堂也。帰途歴遍東相府、及列侯旧棲之地。高声歌黍離章再三而去矣。尋淨妙之古刹。唯一房数衲、庭背置小泉石、發江山之逸興。又扞廢寺。面風須菩薩〔鎌倉諺云、風吹須菩提〕、看弹琴松〔諺云琴彈松〕。脚倦不登慈恩塔婆之旧楚。作六浦、西湖梅、画師擲筆峯三首〔卷二・134〕

※右は長文だが詩題である。該詩の第一首は前掲表の⑨、第二首は⑥、第三首は④である。

**隅田川周辺**

「木戸公号罷釣翁、得和歌之正脈。余在洛而聞厥声譽久之矣。今也共寓武野之佳境、隅田之上流、往還無虛月。豈非天之至幸乎。昨賜該歌三篇、可謂暗投也。聊奉攀末篇之韻脚云」(卷二・74)

※右も詩題。詩は『図絵』に見えないため省略。

〔都鳥、隅田之故実也。河辺有柳樹。蓋吉田之子、梅若丸墓処也。其母、北白川人。〕

「江上春望」〔道灌静勝公、招福鹿両山諸尊宿並少年。浮

(画) 船数艘隅田河、詩歌鼓吹、一時壯觀

也] (卷二・88)

十里行舟浪自花 春遊不覺在天涯

隅田鷗亦応都鳥 鼓吹晚來声入霞

隅田在武蔵下総兩國之間、路傍小塚有柳。道灌公為攻下

総之千葉、搆長橋三条」

「便面」〔八景或雪(需)賛、猷千葉。蓋上総下総、千葉所

管(管)也。今寓武州者、与上下総之千葉矛盾。

一門分為二、灌公牧(収)在武者] (卷二・99)

雪月碧湖煙雨後 漁歌鐘色送飛鴻

片帆千里売花市 上下総婦君握中

〔蓋祝寓武之千葉性種也〕

齋藤県磨の子、月岑は『武江年表』天保四年(一八三三)

の「江戸名所図会梓行」の項に、「此の書は寛政中祖父長秋居士の遺稿、先考県磨の校訂にして、郊外に及ぼせるは大かた県磨の編輯なり。半ば梓に行ひしもの有り」<sup>6</sup>と記しており、

『図絵』における郊外の記述は、おおかた父県磨の手になる」と述べている。市古夏生・鈴木健一「『江戸名所図会』を読むために」には、この項を拠り所として、「月岑が記すように郊外、とりわけ甲州街道沿い、そして品川より南、金沢八景あたりまで幸孝の手に成るものと考えていい」<sup>7</sup>と論じられ

ている。そのようであれば、齋藤県磨は、少なくとも『図絵』

の品川・金沢・神奈川の部分に『梅花無尽蔵』を参照しながら万里の漢詩・漢文を補記したことになるだろう。長文の詩題を持つ「二十有七己亥」三首(卷二・134〜136)とその注を用いて複数の名所の記述を行う点は、隅田川周辺の名所を紹介する際に「江上春望」(卷二・88)の詩と注を複数回使用することにも通底する。このことに鑑みれば、隅田川周辺についての記述に万里の漢詩文を使用したのも県磨であったのではないか。県磨の父長秋が『梅花無尽蔵』を閲覽して万里の漢詩文を引用した可能性も無きにしもあらずだが、第三節に後述するように『梅花無尽蔵』が県磨の蔵書であったことを考えれば、万里の漢詩文を相当数補ったのは県磨であると考えるのが自然であろう。

## 二 『梅花無尽蔵』に見えない注釈の問題

——『新安手簡』の活用——

『図絵』に取り上げられている『梅花無尽蔵』の詩文は、詩題を分割したり、詩中の万里の自注のみを挙げたりして、延べ数ではない実質的な引用は、詩十二首(詩題のみ引用のもの含む)、詩序二篇、注釈七箇条に及ぶ。ところが、前掲表に掲げているように、実際にはこの他に現存の『梅花無尽蔵』

には見えない「伝長老註」が引かれている。これに「芳林主人叔悦和尚、道灌伯父也」とあるのに類似する注には、『続群書類従』活字本所収『梅花無尽蔵』の「芳林主盟叔悦禪師作詩、見謝黄太史集二十卷講畢矣」（巻二・252）における詩題の「叔悦禪師」傍注の「道灌伯父」がある。「伝長老」とは徳川家康に仕えた禅僧金地院崇伝のことで、彼が『梅花無尽蔵』に注記したことは新井白石と安積澹泊の書簡を集めた『新安手簡』（天明年間刊）に見える。白石は澹泊から『梅花無尽蔵』に見える注に、万里の自注ではないものがあるのではないかと尋ねられ、三条の回答を寄せている。左はその一つである。

芳林院ノ事ハ「看李白墨蹟」ノ下、「真筆、在芳林禪院、余於沈（一作）社未見之」<sup>〔河〕</sup>「芳林主人叔悦和尚、道灌伯父也。芳林院、今号金剛寺」。

右、「芳林院今」ト申スヨリ下スヘテ八字、慥ニ伝長老手跡ニテ、草書ニシルシ置カレ候。其時、某、心ニ存シ候ニモ、長老ハ当時、僧録司ニテ、其時ノ僧録ハ臨濟宗許リニ限ラス、諸宗ノ事ノ公事沙汰ニカ、ラレ候ニヨリ、寺社奉行ナトモ是ナク候アイタ、金地ニテ事ヲ決セラレ候ヒキ。夫等ノ事ニヨリ、就中、当地ノ古寺ナトノ由緒ハ、考究詳悉ト見ヘ候カト存シ合セタル事ニ候。コレハ慥ニ国師ノ注セラレ候八字ト見ヘ候ヒキ。

上記によれば、白石の見た『梅花無尽蔵』の「看李白墨蹟」（巻二・57）には、万里の自注である「（白）真筆、在芳林禪院、余於洛社未見之」のほかに、「芳林主人叔悦和尚、道灌伯父也。芳林院、今号金剛寺」の注記があった。これについて白石は、「芳林院、今号金剛寺」の八字は金地院崇伝の草書による手蹟であり、万里の自注ではないと述べている。「芳林主人叔悦和尚、道灌伯父也」の十三字については、前島康彦氏はこれも金地院崇伝の注と見なし<sup>9</sup>、中川徳之助氏は別の詩の注（おそらく「芳林主盟叔悦禪師作詩、見謝黄太史集二十卷講畢矣」（巻二・252）を指す）を写して書き入れたものとしている<sup>10</sup>。「芳林主盟叔悦禪師作詩」の傍注に見える「道灌伯父」の四字は、管見の及ぶ限りでは、東京大学史料編纂所蔵七巻四冊本（謄写本）とこれを謄写した東京都公文書館所蔵四冊本以外の写本では目にする事ができず、後節に取り上げる榎原芳野旧蔵『梅花無尽蔵』にも見えない。崇伝が注を附した『梅花無尽蔵』は散佚したと見られるが、散佚以前のこのテキストを白石は閲覧し、何人かの注を手簡に引いたと見られる。そしてそれを『図絵』の編者が「伝長老注」として取り入れたようである。『図絵』には「芳林院」の部分のように、必ずしも『梅花無尽蔵』から直接採ったとは限らず、また白石の手簡を参考にしたと思しき詩文が散見する。それは『図絵』の「石浜城址」「橋場」の条に引用された万里の詩文であ

る。参考までに、これに関する『新安書簡』の残りの二条を挙げよう。

「橋場」ノ事ハ、「江上春望」ノ詩後ノ注ニ「隅田、在武蔵・下総兩國之間、路傍小塚有柳。道灌公、為攻下総之千葉、構長橋三条、其所号『橋場』」。イカニモ自注ト見へ候ヒキ。

「石浜」ノ事ハ、「便面」題注ニ「八景或雪賛、献千葉。蓋上総・下総、千葉所管也。今寓武州者、与上下総之千葉矛盾。一門分為二。灌公救在武者。寓武之千葉、惟種也。武州浅草石浜城主」。此注ニ「寓武」ト申スト。又「武州云々」ト申スト、逐々ニ注シ候体ニ候。自注ト心得ラレス候。但、万里逐テ注セラレ候ヤラン。大藩ノ御書記、朱書ニ候ハ、タシカニ後人ノ附注ト申スヘク候ハンカ。此方ノ書ニ朱書ノ処ハ是レナク候。

前節所掲の表および「隅田川周辺」を詠んだ作品の引用を照らし合わせて見れば分かるように、通し番号⑨「石浜城址」、同⑩「橋場」、同⑪「隅田河」、同⑫「梅若丸塚」に見える万里の詩文は、いずれも「江上春望」(巻二・88)の詩題・本文・注を使い回したものである。「石浜城址」と「橋場」とい

う二つの項に「江上春望」がこれほど頻繁に引用されるのは、『梅花無尽蔵』に見えるのはさることながら、『図絵』の成立に先んじて、白石の手簡に『梅花無尽蔵』の引用がなされたからではないかと考えられるのである。「石浜城址」を含む隅田川周辺の名所に万里の詩文を引いたのが県磨であろうことは、前節に述べたとおりであるが、「伝長老註」の存在を併せて考えるに、県磨は『梅花無尽蔵』を用いる一方で、『新安手簡』所収の白石の文章をも参考したはずである。

### 三 齋藤県磨の『梅花無尽蔵』

齋藤県磨(一七七二〜一八一八)、名は幸孝、号は莞斎は、父長秋(一七三七〜一七九九)が著した『江戸名所図会』を校訂・増補した。そしてそれを『武江年表』の著者として知られる子の月岑(一八〇四〜一八七八)が天保五年(一八三四)から翌々年にかけて出版した。最終的に『江戸名所図会』の版下を整えたのは月岑であるが、郊外をはじめとする一部を増補したのは前述のように月岑の父県磨である。そして県磨が『梅花無尽蔵』を用いて服部南郭に次ぐ数量の万里の詩文を『江戸名所図会』に収めたであろうことは先に論じたところである。本節では、その『梅花無尽蔵』そのものについて少し詳しく論じよう。

梶原が所有していた『梅花無尺藏』は現存し、国立国会図書館に収蔵されている。もとは幕末から明治にかけての国学者梶原芳野が所蔵し、彼の死後に東京図書館（国会図書館の前身）に献納された七巻四冊本<sup>11</sup>（以下、「榊原本」と略記）がこれである。榊原本については玉村竹二「万里集九集解題」（『五山文学新集』第六巻、東京大学出版会、一九七二年）に詳細な解題が載せられている。玉村氏の解題に付け加えると、この『梅花無尺藏』は太田道灌の末裔が所持していた可能性をもつ由緒あるテキストであり<sup>12</sup>、またこの本に見える「莞斎藏」の印は梶原の蔵書印<sup>13</sup>とされる。

もつとも「莞斎藏」の蔵書印が押してあるからといって、そのことだけに基づいて榊原本を梶原の旧蔵本と断定することはできないので、梶原が榊原本の旧蔵者であったと判断する根拠を述べなければなるまい。その根拠は二つある。

まず一つは、『五山文学新集』第六巻所収『梅花無尺藏』や『続群書類従』活字本所収『梅花無尺藏』などの通行本と『図会』に引かれている『梅花無尺藏』を比較すると、『図会』中の文字の異同が見られる部分は榊原本と一致する場合が多いことが挙げられる。例えば、第一節に挙げた「二十有七己亥、檠桓瀬戸六浦之浜、遺廟之前、掛昔時諸老所作之詩杉（板）、辺傍点画不眠（涙）、如新錫之也」（巻二・134）の詩題に見える「詩杉」（榊原本では「詩杳」。「杳」は「杉」の異

体字）と「不眠」（榊原本でも「不眠」などは榊原本を踏襲したことによる誤りである。また『図会』巻二、「神奈川駅」に引かれる万里の七絶「神奈河」（巻二・47）の第三句に、通行本では「鶉森」という地名が詠まれているが、『図会』と榊原本は「鶉」字を「鴉」字に作る。これは字形の類似から偏の「弟」を「矛」と見誤ったもので、榊原本に特徴的な誤字である。それから『図会』巻三、「平川天満宮」（太田道灌の建立）に引かれている万里の七絶「余比寓武之江戸城。々有丞相祠堂、栽柳挿松、不知幾数百株。文明丙午仲春二十有五、適值丑之晨、寔也（世）之所少也。謹賦小詩、題丞相之壁上。夫径山之伝衣、迺渺茫之説、而国史亦不取之也。故未及茲云」（巻二・89）の詩題に見える最初の「也」字は「世」字の誤りであり、この部分を含む一文は、「寔に世の少とする所なり」と読む。このことから「也」字は誤っていることが分かるのだが、実は榊原本も「世」字を「也」字に誤っているのである。さらにこの詩の第三句「夢中伝法定烏有」（夢中の伝法定めて烏有）は、『図会』と榊原本は「烏」字を「焉」字に作る。「焉」字を用いても読めなくはないが、「烏有」で「何もないこと」の喩えであるので、ここでは通行本のように「烏」字を用いる方が適当であろう。梶原の子月岑は、第二節に引用した『武江年表』天保四年の「江戸名所図会梓行」の項の続きの部分に、「又草稿漸く成りて浄書に及ばざりしも



の有り。先考歿後遺稿を浄書して庸書に委ねしは、おのれが若冠の頃に於て、烏焉うえんの誤謬尠ならず。今にいたりて悔ゆれどもかひなし。杜撰ずせんの罪を先考におはせざらんが為こゝに書きつく」と述べ、梶磨の遺稿を清書した『図絵』の原稿を筆耕にわたしたのは若い時であり、「烏焉うえんの誤謬」の少なくともないことを悔いている。『図絵』中に散見する誤りの幾つかは、月岑が梶磨の字を読み誤ったことに由来するであろう。だが、『梅花無尺蔵』に見える字句に限るなら、梶磨が参考した楳原本の本文自体が誤っていたことにも起因するのである。

ところで、『図絵』に収める『梅花無尺蔵』には、文字の誤りよりもテキスト上の誤りが大きく影響した部分が見られ、このことをもって梶磨が楳原本を所蔵していたもう一つの根拠と見なすことができる。次に『図絵』巻三、「平川天満宮」に引用されている「遊江戸城菅丞相祠堂」（巻四・64）とこれに続く一首を挙げよう。

〔同書云〕 「遊江戸城菅丞相祠堂」

開闢評花甚不公 独居南面牡丹紅

若令丞相細分州マツ（一品） 梅亦応編王者中

宋末江湖梅亦孤 吟香白髮老浮屠

横斜月瘦一枝影 分作文公大マツ（太） 極図

上にいう「同書」とは『梅花無尺蔵』のことで、「遊江戸城菅丞相祠堂」が「平川天満宮」の項に先に引用される七絶「余比寓武之江戸城」（巻二・134）に続くゆえにこのように記している。『図絵』を見る限りでは、「遊江戸城菅丞相祠堂」は二首の連作詩となつてゐるのだが、通行の『梅花無尺蔵』ではこの詩は一首のみであり、「宋末江湖梅亦孤」で始まる七絶は、実は「読円悟禪師梅花詩」（巻四・52）と題する別の詩である。なぜこのような誤りが生じてゐるのか。その原因は、楳原本第三冊を見ればおのずと明らかになる。実はこのテキストでは、何人かが「遊江戸城菅丞相祠堂」と「読円悟禪師梅花詩」の部分の数枚の綴じ方を誤つた結果、この二首が連作詩のように並ぶことになつてしまつたのである。乱丁の実相は次のようになる。論述の便宜のため、楳原本の漢詩の詩題に作品番号を冠して配列しよう。なお丁数の下の「オ」は表、「ウ」は裏を表す。また丁と丁の境目には縦線を挿入する。

卷四・52 「読円悟禪師梅花詩」	第15丁ウ
※詩題・題注のみ。詩本文はなし	
卷四・56 「依新命大安堂上師韻」	第16丁オ
卷四・57 「天神賛」	第16丁オ
卷四・58 「笑隱道人、近住尾山田市場一菴」	第16丁ウ
卷四・59 「観音画賛」	第16丁ウ

卷四・60 「天神贊」	第17丁オ
卷四・61 「居士靈昭女、画軸」	第17丁オ
卷四・62 「観音贊」	第17丁オ
卷四・63 「布袋」	第17丁ウ
卷四・64 「遊江戸城菅丞相祠堂」	第17丁ウ
卷四・52 (読円悟禪師梅花詩)	第18丁オ
※詩本文・詩注のみ。詩題と題注はなし	
卷四・53 「禪源師翁瑞世、夫江湖瓢笠」	第18丁オ
卷四・54 「東坡次丹陽迎仏印元図」	第18丁ウ
卷四・55 「大安藏春翁、擊洛北」	第18丁ウ

右の一覧から分かるように榊原本においては、「読円悟禪師梅花詩」(巻四・52)の題と詩本文の間に、「依新命大安堂上師韻」(巻四・56)から「遊江戸城菅丞相祠堂」(巻四・64)までの二丁分(第16丁と第17丁)の詩が竄入している。したがって、「遊江戸城菅丞相祠堂」と詩題の欠けた「読円悟禪師梅花詩」が連作詩のように連続して配置されることになり、その結果これを参考した県磨がこの二首を連作詩と誤認して、そのまま『図絵』に引用することになったのである。以上のことから、県磨が参照した『梅花無尽蔵』は、確かに榊原芳野旧蔵の『梅花無尽蔵』であることが証明できたであろう。

### おわりに

かつて斎藤県磨が所有し、榊原芳野の手にわたり、芳野の没後に国会図書館に収められた『梅花無尽蔵』は、巻一から巻七までを完備した貴重な写本である。これが県磨の所蔵となるまでにかかる過程を経たのは、残年ながら今では知るよしもない。もとは遠江掛川藩主太田家に所蔵されていたはずの『梅花無尽蔵』<sup>14</sup>が、江戸の神田雉町名主であった斎藤家の入手するところとなったのは興味深いことであるが、それはさておき、県磨が『図絵』の校訂・増補の際に『梅花無尽蔵』を活用したことによって、万里の作品が服部南郭に次ぐ地位を占めるに至ったことは間違いない。その意味では、『梅花無尽蔵』の受容史において榊原本は甚だ重要な位置を占めるであろう。今回、『図絵』における『梅花無尽蔵』を調査した結果、『図絵』に引用されている万里の詩文には、榊原本の文字がもともと誤っていたこと、若年の時の月岑が県磨の原稿を清書する際に写し誤ったことを差し引いても、想外に漢字の誤記の少なくないことが分かった。これは県磨をはじめとする町人階層の読書人にとって、漢詩文の読解が必ずしも容易ではなかったことを意味するかもしれない。『図絵』に引かれる和文の漢字には振られている読み仮名や訓点、

大部分の漢詩・漢文には見えないこともこの想像を助けるであろう。それはともかく、県麿が江戸の名所記である『図絵』において『梅花無尽蔵』を活用した試みは、幕末から明治にかけて活躍した幕臣勝海舟によって同様に受け継がれることになる。そのことについては、あらためて別稿に論じることしよう。

【附記】今回執筆にあたり、国立国会図書館ならびに東京都公文書館をはじめとする諸機関に多大なご協力を賜りました。ここに心より感謝申し上げます。なお本研究は、JSPS科研費JP16K02369の助成を受けたものである。

注

1 日野龍夫『服部南郭伝攷』（ベリかん社、一九九九年）三二四頁、池澤一郎『江戸文人論』（汲古書院、二〇〇〇年）二五七頁を参考した。また『江戸名所図会』についての総合的な研究には、千葉正樹『江戸名所図会の世界―近世巨大都市の自画像』（吉川弘文館、二〇〇一年）、齋藤智美『江戸名所図会』の研究』（東京堂書店、二〇一三年）などがある。ちなみに『図会』中の挿絵に見える漢詩二十八首の内訳を見れば、服部南郭の十四首以下、山崎闇斎三首、林羅山・太宰春台・高野蘭亭各二首、そ

れから、沢庵宗彭・林春斎（鷲峰）・東臯心越・元政・新井白石の各一首が続く。なお挿絵中の漢詩の収録状況を確認するにあたっては、鈴木健一『江戸名所図会』所引の詩歌について』（『文学』第三巻第二号、岩波書店、二〇〇二年）九一―九六頁を参考した。

2 注（1）所掲の千葉・齋藤両氏の著書には、万里集九と『梅花無尽蔵』への言及は見られない。市古夏生・鈴木健一『江戸名所図会事典』（新訂 江戸名所図会）別巻二、ちくま学芸文庫、一九九七年）所収『江戸名所図会』を読むために』には、簡単にはあるが『江戸名所図会』引用の詩歌』の章に『万里集九』の項が立てられている。

3 『江戸名所図会』については国会図書館デジタルコレクションを閲覧した（左記URL）。  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndj/pid/2607785>

また併せて市古夏生・鈴木健一『江戸名所図会（一―六）』（ちくま学芸文庫、一九九六―一九九七年）および注（2）所掲『江戸名所図会事典』を参考した。

4 市木武雄『梅花無尽蔵注釈』第一巻―第四巻（続群書類従完成会、一九九三―一九九四年）

5 注（2）所掲『江戸名所図会事典』附録『江戸名所図会』人名・地名・書名索引』による。

6 齋藤月峯著、金子光晴校訂『増訂武江年表』第二巻（平凡社

東洋文庫、一九六八年）八六〜八七頁、天保四年の項より引用。

【武江年表】からの引用は、すべて本書による。

7 注(2)所掲【江戸名所図会事典】所収。本文の引用は同書三三頁より行つた。

8 本稿に引用する立原翠軒輯「新安手簡」（天明年間刊）の原文は、早稲田大学図書館蔵本による。閲覧に際しては、早稲田大学「古典籍総合データベース」（左記URL）を利用した。

[http://archive.wul.waseda.ac.jp/koshof/13/13\\_01034/](http://archive.wul.waseda.ac.jp/koshof/13/13_01034/)

9 前島康彦『太田氏の研究』（名著出版、一九七五年）一九四〜一九五頁を参照。

10 中川徳之助『万里集九』（吉川弘文館、一九九七年）二三四〜二三七頁を参照。

11 榊原本の調査にあたっては、国立国会図書館デジタルコレクションの「梅花無尺蔵」（左記URL）を閲覧した。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndjp/rid/2605444?tocOpened=1>

12 太田道灌の末裔がかつて「梅花無尺蔵」を所有しており、その一つは土井鶯軒旧蔵本（国立国会図書館蔵）、もう一つは榊原芳野旧蔵本（同上）であり、これらは同じ系統のテキストと見られることは、拙稿「早稲田大学蔵「梅花無尺蔵」について――

図書刊行会原稿を中心に――」（『熊本大学教育学部紀要』第六六号、二〇一七年二月）に論じた。併せて参照されたい。

13 「莞斎蔵」の蔵書印が斎藤県磨のものであるということについて

ては、国文学研究資料館ホームページ「電子資料館」の「蔵書印データベース」（左記URL）に詳細な情報が載せられている。

[http://base1.nijl.ac.jp/~collectors\\_seal/](http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/)

14 玉村竹二「万里集九集解題」（既出）における榊原本の解題に、この本には「静勝文庫」の蔵書印が見えることが指摘されている。この印は国文学研究資料館ホームページ「電子資料館」の「蔵書印データベース」（既出）によれば、遠州掛川藩主太田家の蔵書印である。当家が太田道灌の末裔であることについては、注（9）所掲、前島康彦『太田氏の研究』一五二〜一五八頁を参照。（なかお・けんいちろう 熊本大学教育学部准教授）